奥ノ仁田遺跡出土品

【所　在　地】西之表市西之表 7585　種子島開発総合センター
【種　　別】県指定有形文化財（考古資料）
【指定年月日】平成 11 年３月 19 日

奥ノ仁田遺跡は西之表市の東南部の安城地区にあって，中種子町との境に近く，太平洋を望む標高約 133m の台地上に立地する。平成５（1993）年に農道建設工事に伴って西之表市教育委員会が実施した発掘調査によって，縄文時代草創期の遺構や遺物が発見されて注目された。

種子島は縄文時代早期（約 9,500 年前）以降には県本土と共通の文化圏に属することが確認されていたが，奥ノ仁田遺跡の発見によってこれより古い縄文時代草創期（約 12,000 年前）から本土との文化の交流が確認された。

土器 130 点と石器・石製品 73 点の合計 203 点が指定されている。土器は器壁に粘土紐を貼り付けた隆帯文（隆起線文）土器と呼ばれる土器である。これまでの隆帯文土器のほとんどは指頭で文様をつけたものであったが，奥ノ仁田遺跡の土器の特徴は貝殻で文様をつけたものが多いことである。同様の土器は宮崎県南部の遺跡でわずかに出土していたが，これほどまとまって出土したのは初めてである。石器としては石斧，石鏃，磨石，石皿など多様な石器が出土した。石斧の形態はバラエティに富み，優れた木材加工技術が存在したことがうかがえる。磨石と石皿は食物の調理加工の道具であり，植物性食料であるドングリ類を食べていたと想像される。石鏃は矢の先に付ける石器であり，動物の狩猟に使われた。石鏃には打製石鏃以外に１点の磨製石鏃が出土した。

最近発掘された中種子町三角山遺跡や西之表市鬼ヶ野遺跡でも同様な遺物が出土している。